



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 32 回 日本語教育方法研究会
神奈川大学
2009 年 3 月 21 日 (土)

会長 才田いずみ

今回は神奈川大学のご厚意により研究会を開催する運びとなりました。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 32 回研究会開催について

日 時 :	2009 年 3 月 21 日 (土)
会 場 :	神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 セレストホール
開催委員 :	富谷玲子 (神奈川大学) 名嶋義直 (事務局, 東北大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付 ポスター貼付	1:40	総会
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開会の挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方の説明	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:00	参加者全員で後片づけ
		5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場です手続きをして参加することができます。お誘い合わせの上、ご参加ください。

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 短期交換プログラムにおける日本語クラスのレベル設定の試み- Can-do-statements を利用して -
保坂敏子（日本大学）

日本大学日本語講座では2ヶ月半の短期プログラム「日本語・日本研究講座（JLSP）」を年3回実施している。日本語クラスにはJLSP生だけでなく、学部交換留学生や正規の学部生、院生も受け入れているが、学習者のニーズが背景が異なり、プレイスメントや授業運営に影響を及ぼすようになってきている。多様な学習者に対し、より適切な学習機会を実現するために、現在Can-do-statementsを利用した日本語クラスのレベル設定を試みている。本発表では、レベル設定のために実施しているCan-do-statements調査の概要と経過、現在までに分かったことについて報告する。

2. 母語話者の意識化を促す語彙記述-「日本語観察館」が目指すもの-
植木正裕・有賀千佳子・二瓶知子（独立行政法人国立国語研究所）

本発表では、日本語語彙教育のためのウェブサイト『日本語観察館』を紹介する。「そちらの一存をお聞かせ下さい」「この仕事は別人に頼もう」のような使い方がおかしいことは、母語話者なら誰でも直感で分かるし、適切な言い方に訂正することも可能であろう。しかし、訂正するだけでは学習者の語彙の力を伸ばすことには必ずしもならない。教授者であれば、その使い方がなぜ間違いであるのかをきちんと説明することが肝要である。しかし、このような使い方がおかしいと感じる理由には、各語彙項目に対して母語話者が無意識に持っている規範が関わっていることが多く、自分がおかしいと感じる理由を努めて意識化しないかぎりには、同様の誤用に接した場合に学習者に説明することができない。各語彙項目に対して持っている規範を母語話者自身がどのように意識化すればよいのか、母語話者の日本語教授者向けのウェブサイト『日本語観察館』の記述を用いて紹介する。

3. 中上級日本語学習者の会話維持-教室談話との違いから-
吉田 睦（筑波大学大学院生）

近年、日本語教育の教室活動において、談話の展開を重視した実用的な日本語を取り入れた活動が行われている。しかしながら、実際の談話展開を理解し長時間の会話を維持することは中上級学習者であっても容易ではないと考えられる。本研究は、日本語学習者が教室内で用いる「教師-学習者」間の定型的談話では習得しにくい、長時間会話を続ける（会話維持）場面に焦点を当て、日本語中上級学習者がどのように会話を維持しているか分析を試みた。資料は母語話者との初対面2者間の30分の録音・録画資料であり、具体的な談話資料を分析することで会話進行中の質問表現の使用に特徴があることが示された。これより教室談話との違いを検討し、会話維持場面のストラテジーを考察する。

4. 教師間でビリーフの共有を行った教室活動-ノンネイティブ教師とネイティブ教師によるチームティーチングでの実践-

高橋雅子（早稲田大学大学院生）

海外ではノンネイティブ教師とネイティブ教師によるチームティーチングで日本語教育を行っている機関が多く存在する。そのようなチームティーチングでは、スケジュールどおりに授業を進め、報告書で引き継ぎをし、会議で学習者の様子を報告するという方法でクラス運営が行われることが多い。しかし、個々の教師が持っているチームティーチングにおけるビリーフが注目されることは少ない。発表者は海外でノンネイティブ教師とビリーフの意識化・共有化を行いながら、チームティーチングで日本語教育を行った。クラス開講前および期間中にビリーフチェックシートを用いて自分のビリーフを意識化し、お互いのビリーフの共有を行い、話し合いを行っ

た。そして、その話し合いをもとに、スケジュールやクラス運営の方法を修正した。その結果、教師間で教授理念にずれの少ない教室活動ができた。本発表ではビリーフの意識化・共有化の方法、および授業内容について述べる。

5. 日本語分析に有用な「よい例文」を作り出すストラテジーとそのトレーニング法の開発

坂口和寛（大月短期大学）・河野俊之（横浜国立大学）

類義語分析に役立つ「よい例文」を作り出す技術を養成するストラテジートレーニング（ST）を作成し、その有用性を調査により探った。本研究では特に、言語要素を多く持ち情報量が多い「具体的な例文」を類義語分析に役立つ「よい例文」とする。そして、例文構造を複雑化して例文を具体化するストラテジーを取り上げる。ST では、①文節数増加、②複文化、③会話文化という三つの形式的側面から簡潔な例文を作り変えるストラテジーを指導した。調査の結果、ST での意識化前には文節数の少ない例文を作っていた被調査者が、ST 後には文構造の複雑な例文を円滑に作り出していた。このうち文節数増加により、例文内容を限定的かつ具体的にし、内容の曖昧さを小さくできていた。また複文化や会話文化では、例文の文脈が明確に言語化できていた。日本語分析経験がない母語話者である被調査者が、類義語の弁別的特徴を示唆する例文も作れていた点でも、ST の有用性が指摘できる。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 21 件）

6. 中級レベルにおける語の学習を促す教材について

鈴木美加（東京外国語大学）

本発表では、中級レベルにおいて語が持つ核となる意味を理解し、記憶に留めやすくするために作成した教材を紹介する。教材は練習問題の形式とし、語の意味を、短い文あるいは文章からなる文脈によって把握しやすくした。利用教材の解答の傾向から学習者の語の理解の内容について特徴を挙げ、授業での学習者と教師のやりとりも示した。本教材の利用により、学習対象語についての知識を、短時間に多くの練習問題をすることにより確認し、得ている様子が認められた。今後、教師の説明や教室内での相互作用を組み込める語の練習と、現在開発中の自学自習ペースでの PC 教材での語の練習の効果の違いも明らかになるとと思われる。

7. 語の文体的特徴に関して学習者はどのように認識しているかー類義語の副詞に対する調査からー

前坊香菜子（株式会社早稲田総研インターナショナル）

本研究では、学習者が類義語間の文体差をどのように認識しているのか調査した。13 の類義語のグループ、計 38 語の副詞を提示し、レポートに適切か不適切かという質問紙調査とフォローアップインタビューを行った。調査の結果、会話でよく使用される語彙の知識に差が見られた。「あんまり」「やっぱり」のように話しことばの正答率は高かったが、「とても」「たくさん」のような初級で学ぶ語の文体はあまり意識していなかった。

8. 日中米の日本語教科書のジェンダー表現

殷悦（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本稿では、日中米で出版された日本語教科書の会話の部分におけるジェンダー表現を分析する。分析に際し、終助詞の使用と丁寧さにおける男女差に焦点を当て、終助詞の男女の使用頻度の相関を示す。次に、丁寧さを三つのレベルに分けて、男女別に頻度を集計する。これらの分析結果によって、日中米の日本語教科書における終助詞の使用と丁寧さの差異を明らかにした。

9. Skype を使用した「気づき」を促すビジネス電話練習

伊藤亜紀（YAMASA 言語文化研究所）

本発表は実践ビジネス日本語コース（JBPP）のパイロットにおけるビジネス電話練習の授業報告である。授業ではインターネットを利用した音声通話ソフトウェア Skype とその録音機能を持つ Pamela Call Recorder を使用した。セミナー形式でビジネス電話の語彙、表現、マナーを学習後、少人数用 PC 教室において、学習者は電話のロールプレイを行う。その会話を各自録音し、MP3 の音声ファイルとして保存する。教師はその音声ファイルを聞き JBPP 専用オンラインページにフィードバックを載せる、という行程を踏む。学習者の電話会話を録音することで、学習者の積極的な授業参加を促すことができ、またフィードバックを読みながら、その会話を聞くことで、客観的に発話を振り返り、言語面非言語面双方において学習者の気づきを促すことができる。Skype, Pamela Call Recorder, MP3 ファイル、専用オンラインページでのフィードバックなど、テクノロジーを使用した実践的な電話練習の方法として提案する。

10. 接触場面における母語話者の配慮・調整の分析-教室内での会話練習とフィールドトリップでの会話-

中井陽子（国際教養大学）

学習者と母語話者が参加する接触場面では、学習者だけでなく、母語話者からの「歩み寄りの姿勢」が必要である。本研究では、特に、母語話者からの歩み寄りに焦点を当て、接触場面における母語話者の配慮・調整を分析する。分析する接触場面の会話データは、1)教室内での会話練習中の会話と、2)フィールドトリップで課題解決をしている際の会話である。会話参加者は、日本語クラスに授業ボランティアとして参加していた母語話者と、日本語学習者である。分析の結果、教室内の会話練習の接触場面では、主に、意味交渉、会話維持などができる言語能力や社会言語能力の他、非母語話者の文化知識を持っているという社会文化能力も必要であることが分かった。一方、フィールドトリップでは、主に、実質行動の課題解決ができる社会文化能力が重要であり、それに伴って意味交渉や会話維持ができる言語能力と社会言語能力も必要となることが明らかになった。

11. 初級者の1分スピーチから見えてきたこと-学習者はどのような表現を必要としているのか-

市川明美（北海道大学）

学習者は学んだ項目を実際にどのように使い表現するのだろうか。また学習者の表現に不自然なものが出てきたとき、もしくは未習の表現を用いたとき、その説明、フィードバックをどのようにするべきなのか。本研究では授業中に行われる「1分スピーチ」から得られた情報をもとに、接続詞の「そして」「それから」に焦点を合わせ、文脈化の重要性について述べる。

12. 音声を利用した初中級日本語学習者向けデジタル漢字教材の開発

前原かおる・李 相穆（東京大学）

発表者の所属機関で開発した初中級学習者向けデジタル漢字教材を紹介する。本教材は、約 500 字の漢字を字形(部首, 似た字形の識別) 意味・機能(場面, 動詞などの用法, 接辞)などのさまざまな括りで毎回 10~15 字程度ずつ提示するものである。デジタル教材の特性を生かし、語と漢字の意味の関係を、音声を媒介にして学習するパートを備えた点が特徴的である。そのほか、マウスオーバーにより反復して読み練習ができる点、最小限の漢字語彙からなる Simple 版と、より情報豊富な Detail 版の選択ができ、学習者のレベルや目標に応じた利用が可能である点も特徴となっている。発表では、このような教材を併用した初級後半レベルのクラス（漢字圏・非漢字圏学習者が混在）での実践例もあわせて報告する。

13. 漢字クラスにおける日本人サポーター活用の様々な可能性

向井留実子・高橋志野（愛媛大学）

愛媛大学の非漢字圏学習者対象の漢字クラスでは日本人のサポーターが1対1で対応するという形態をとっており、学習者とサポーター双方に好評である。また並行して、この漢字クラスサポートの質向上のため、サポーター自身がサポート方法を検討する講座を持った。本発表では、この漢字クラスとサポーターによるサポート方

法検討の講座の紹介を行い、漢字クラスにおける日本人サポーター活用の様々な可能性について述べる。

14. 大学院における初級日本語クラスの意義と可能性-英語で研究活動を行うコースの単位取得科目として-
田崎敦子・越前谷明子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝（東京農工大学）

英語で研究活動を行うことが可能な理工系大学院では、日本語能力皆無で来日する留学生も珍しくないが、彼らは研究活動に集中するために日本語クラスを受講しない、また、たとえ受講を決めても、研究との両立が困難、指導教員の理解を得られない等の理由から途中で断念してしまうことが多い。しかし、実際は、研究室内の日本人学生や他の留学生とのコミュニケーションや人間関係の構築には日本語が不可欠だといわれている。そこで、東京農工大学国際センターでは、英語で研究活動を行う大学院のコースにおいて、日本語を受講することで大学院の修了単位を取得できるシステムの構築や、正規科目として開講されている「異文化コミュニケーション学」との連携を行い、初級レベルの日本語教育の充実を図った。本発表では、この試みのもとで彼らのニーズに合わせて行った活動、及びその成果と課題を示す。

15. 就職準備のためのビジネス日本語クラスにおけるピア・ラーニングの可能性
田中敦子（東海大学）

アジアの相互理解と経済連携の促進を目指した「アジア人財資金構想（経済産業省、文部科学省）」が 2007 年より実施されている。次いで 2008 年「留学生 30 万人計画」が発表され、今後ますます日本で就職を目指す外国人留学生は増えていくだろう。だが、多くの企業は留学生を日本人学生と区別せずに選考しており、このような厳しい状況下、就職を視野に入れた授業を実施する大学・大学院が増えている。本発表は、2008 年秋よりアジア人財資金構想に参加している東海大学におけるビジネス日本語クラスの実践報告を行う。授業ではまだ学生である学習者が企業で働くことをどれだけ自分に引きつけて考えられるか、また、企業で働くのに必要な問題解決能力、コミュニケーション能力をどれだけ伸ばしていけるかという 2 点を中心にピア・ラーニングを指針とした就職準備クラスについての報告をする。

16. 自律を促す日本語学習-プログラムの「実践年表」から見える支援のあり方-
齋藤伸子・鈴木理子（桜美林大学）

「チュートリアル」は東京都下の大学で 2003 年度から現在まで実施されている、学習者の自律を目標とした、留学生対象の個別対応型日本語授業である。チュートリアルは、他の日本語科目の授業内容や科目構成にも影響を与えつつ変化してきた。プログラム、チュートリアルの実施状況、会議内容を年表形式に並べ、時系列に見た結果、それぞれの関係が見えた。チュートリアル教師は個々の学習者の声に耳を傾け、支援をする中で、複眼的かつ総合的な支援の必要性を感じてきた。一人ひとりの学生の学習に関する情報が共有されることで、他クラスの教師にも同様の変化がもたらされた。プログラム全体でそれを検討することがプログラム全体の変化につながっていった。チュートリアルは、教師から他の教師、またプログラムに対するボトムアップの働きかけを生じさせた。プログラムは、科目設置上は個別性を重視する方向へ向かいながら、質的には教師の協働性を推進する方向へ向かっている。

17. 日本語教員に求められる資質・能力-多文化共生社会における日本語教員の文化能力-
安達万里江（(財) 京都日本語教育センター）

本研究のアンケート調査による結果から、教師は「異文化理解」の項目群を重要視していることがわかったことに対し、学習者は、学習者自らが置かれている環境を踏まえた上で「多文化共生」つまり、学習者同士の多様化している「文化」の捉え方を重要視していることが見えてきた。日本語を使い、「文化」を語る上で、「文化」をどう捉えているのか、日本語教員・学習者が指導・学習する中で語れる能力を、双方が養っていかなければならないと考える。また、今後は教師と学習者間のみならず、教員養成機関の教員・受講者間の多文化共生社会の

環境を作り出す「コミュニケーションのための文化能力を養うこと」が、最重要課題であると考えられる。

18. 積極的な読みを促す学生主体の読解授業

渡邊芙裕美（筑波大学大学院生）

本稿では大学の学部留学生を対象として行った授業について報告する。授業では、学生の主体的な読みを促すために、学生に本文の解説を行わせたり、内容理解問題を作成させたりする活動を行った。その結果、読みに対する姿勢の変化が見られた。これまではわからないところがあっても、質問せずに流してしまうという消極的な姿勢が見られたが、本授業では解説担当の学生に積極的に質問したり、わからない部分について学生同士で話し合っ解決するといった姿が頻繁にみられた。また学生が作成する内容理解問題の質も局所的な理解のみを問う問題から全体的な理解を問う問題へと変化していた。教える側の利点としては、学生の解説内容や質問を聞くことによって、どこでつまづいているのかを把握することができたことが挙げられる。

19. 日本語専攻で学ぶ学生の教科書に対する満足度-中国の大学における日本語学習調査から-

伊月知子（今治明德短期大学）

中国の大学の日本語専攻における日本語教育は、教育部の制定する学習指導要領に沿って行われている。この学習指導要領が 2000 年を境にして大幅に改訂されたことにより、日本語専攻における教育内容がそれまでの“反復・暗誦重視”型から“実用的・総合的運用能力の養成”型へと変化し、学習指導要領に基づいて編集される教科書にもその影響が及んでいる。そこで、日本語専攻の学生を対象にして調査を行い、(1) 2000 年以降に出版された新しい教科書は以前の教科書に比して学生の満足度が高く、その理由としてレベルや学習方法を高く評価していることから、“実用的・総合的運用能力の養成”という新しい日本語教育の目的が学生に広く受け入れられていることを明らかにした。(2) 日本語専攻の学生において、現代日本人の行動習慣や思考方式に対する関心が高いという特徴があり、日本に関する知識や情報の現時性を重視する傾向があることを明らかにした。

20. メキシコにおける初級日本語学習者へのブログを使用した学習支援-学習行動の変化に着目して-

佐藤 梓（北海道大学大学院生）

海外の日本語学習環境では、教室外での日本語使用機会はあまり多くない。そのような環境は、学習言語の技能向上や学習意欲の維持・向上への影響だけではなく、与えられた課題や義務を伴う学習以外には自発的に向かわなくなる可能性も考えられる。そこで本研究では、メキシコの初級学習者を対象にブログを用いた教室外活動を学習支援として行った。ブログ活動では、日々のできごとなどを綴ることができ、自分のペースで日本語を書き、読むことが可能である。本ブログ活動では、ブログの記事を軸にコメントを用いて日本人協力者とのやり取りを行った。調査では、ブログ活動を通じてどのような学習行動の変化をするかについて事前事後質問紙調査、事後インタビュー調査を行った。分析の結果、教室外での学習行動にこれまでとは異なった行動を促すことができ、さらに、教室活動とは異なった手段を用いて表現する活動を促すことが可能であることが示唆された。

21. タイの大学生に対する遊びの要素を取り入れた漢字授業の試み

ガルナー・コンラチャック（滋賀大学大学院生）・佐藤礼子（東京工業大学）

タイ人日本語学習者には漢字への苦手意識が強い学生が多い。本発表では、主に暗記中心の漢字授業を受けてきたタイの大学生を対象として、遊びの要素を取り入れた漢字語彙の実験授業を行い、学習意欲を高めようとした。授業では、漢字語彙の意味を推測させる活動や、パズルやカルタを用いた学習活動を行った。発表では、授業の様子やテストと感想シートの分析結果をまとめ、遊びの要素を取り入れた活動について分析する。

【午後の部】

●総会

●口頭発表（5件）

22. 日本語研修と地域のよりよい連携のために-地域の協力者とのワークショップ及びホームステイ事前活動の報告-

石井容子・川嶋恵子（国際交流基金）

ホームステイ（HS）やビジターセッション等の交流プログラムで協力を依頼する地域の協力者との連携を振り返り、よりよい関係を構築することを目指してワークショップ（WS）を行った。WSでは、①交流プログラムと日本語学習との関連の強い研修の紹介を通して交流プログラムの位置付けの理解を促し、その後、②各参加者間の経験を共有するグループワーク1、③日本語研修全体や学習者の事情への意識化を目指した架空の日本語研修の交流プログラムを計画するグループワーク2を行った。また、WSで協力者らがHS時に困った経験を多く持ち、HS事前の十分な情報を求めていることが分かり、ホストファミリーと学習者間でのHS事前情報交換活動を試みた。2点の活動のような事前事後のサポートを丁寧に行うことで、協力者・学習者双方にとって交流プログラムの意義は深まり、また、地域の協力者とのよりよい関係構築へも繋がっていくものと考えられる。

23. アイカメラを使って観察した日本語レベルによる文章の読みの特徴

柳澤絵美・大木理恵・鈴木美加（東京外国語大学）

日本語学習者の文章の読み方はレベルによってどのように異なるのか、アイカメラを用いた眼球運動の軌跡データから分析した。初級～上級の学習者25名を対象に、2種類の文章を読む時の視線移動データを取り、分析を行った。文章を読む際に全体をまんべんなく注視しながら視線を移動させ、各語の意味を取るように読み進める読み方を「ベタ読み」というが、本実験では、内容理解のために「ベタ読み」を何度も繰り返す人が多い一方で、「ベタ読み」をした後に、文章中のいくつかの重要語句を注視する「キーワード読み」と言えるような読み方も現れた。この「キーワード読み」は、中級学習者以降に比較的多く現れた。この結果から、読解力向上のためには、初級後半から文章中にある重要語句を探し出すような練習を取り入れることが有効であると考えられる。また、日本語レベルは、読解所要時間、理解度、「ベタ読み」回数、と相関があったことも確認された。

24. 漢字学習における「語彙先習」の効果

虫明美喜・菅原和夫（東北大学）

メインテキストとして『みんなの日本語』のような総合教科書を使用し、それとは独立して漢字を学習する場合、漢字学習の負担を軽減する一つの方法として、「語彙先習」がある。ここでは、「語彙先習」の効果や有用性について、非漢字系学習者のテスト結果を分析し、検証する。さらに、その分析をもとに、非漢字系学習者への効果的な漢字指導として、漢字テキストとメインテキストに共通した語彙指導の強化などについて提案する。

25. 初級からのスピーチ指導-まとまりのある話ができるために-

工藤嘉名子・藤森弘子（東京外国語大学）

東京外国語大学留学生センター（JLC）では、国費学部留学生を対象に、「JLC 日本語スタンダード」に基づいた口頭表現指導を行っている。初級では、身近なテーマについて短い時間（1分程度）でまとまりのある話ができることを到達目標とし、即興形式の1分スピーチ活動を取り入れている。本研究では、1分スピーチ指導の成果と課題を明らかにする目的で、初級修了時に実施した口頭表現試験のスピーチデータを分析した。その結果、日本語未習で来日した学生の7割以上が初級の到達目標に達していることがわかった。また、スピーチ構成においては、7割近くの学生が、授業で指導した3部構成(Opening-Body-Ending)で談話を展開していた。さらに、結束性に関わる接続表現・指示詞の使用状況の分析から、特に「そ」系指示詞の使用において、スピーチ指導が有効に働いていたことが明らかになった。

26. IDF を用いた単語レベル判定システムの構築と検証

北村達也（甲南大学）・富岡洋介（甲南大学大学院生）・川村よし子（東京国際大学）

本研究の目的は日本語の単語レベルを評価するための信頼できる基準を作成し、それを用いて単語レベル判定システムを開発することである。我々はすでに日本語能力試験の出題基準(川村, 1999), 単語親密度および単語出現頻度(川村, 2008)にもとづく単語レベル判定システムを開発し, 我々の web ページ (<http://language.tiu.ac.jp/>)にてリーディング・チュウ太の一機能として公開している。本研究では, 新聞記事データベースから計算した IDF (inverse document frequency)を単語レベル判定基準として用いることを試み, その評価を行った。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 20 件）

27. 留学生のための経済の専門連語-「公民」「現代社会」教科書を資料として-

小宮千鶴子（早稲田大学）

言葉を自然で流暢に使うためには, 連語の知識が欠かせないが, 専門連語（専門的な概念を表す連語）を知ることが困難である。本研究では, 中学と高校の教書を資料に経済の基本的な専門連語の修正版の選定を行った。

28. Skype を用いた会話セッションの試み-日本語学習と日本語教育実習の観点から-

嶺岸玲子（盛岡大学）

会話とチャットが可能な無料ソフト Skype を利用することで, 海外の日本語学習者も日本にいる母語話者との会話が可能になる。母語話者が日本語教育を学ぶ学生である場合, 日本語だけの会話で双方が目的を持つことができる。アンケート調査の結果から, 日本語学習及び日本語教育の学習において, 学習者も母語話者も動機づけを高め, こうした会話セッションがそれぞれの学習に有益であると感じていることがわかった。

29. 「丁寧に話す」という概念についての一考察 —日本語母語話者に対する質問紙調査をもとに—

里見 文（筑波大学大学院生）

日本語教育の現場では, 目上の人やそれほど親しくない人に対しては「丁寧に話す」よう指導することが多いが, 我々日本語母語話者は「丁寧に話す」という概念をどのようなものとして捉えているのであろうか。そこで本研究では日本語母語話者は, 「丁寧な話し方」とはどのような話し方であると捉えているのか, また, 上下親疎が操作された相手に対してどのような話し方をすることが「丁寧に話す」と見なされているのか, を明らかにするために質問紙調査を実施した。その結果, 日本語母語話者が持っている一般的な「丁寧な話し方」という概念は, 「礼儀正しい話し方」「敬意のある話し方」であることが窺えた。しかし, 対話者として上下親疎を操作した相手を想定した場合, 「丁寧に話す」という概念は, 鍵概念の順位付け等, 決して一定ではないことが明らかになった。それはまた, 一般的な「丁寧な話し方」として認識されているものとも異なっており, 我々が日本語教育の現場で「丁寧に話す」よう指導する際に, 十分な配慮が求められることを示唆するものであった。

30. いわゆる「誤り訂正」に失敗した場面の会話分析-マルチリンガル間日本語日常会話を通して-

原田幸一（横浜国立大学大学院生）

本発表では, マルチリンガル間日本語日常会話データ内に現れたいわゆる「誤り訂正」に失敗した場面を取り上げ, 会話分析を行い, 「誤り訂正」の失敗がいかんにして相互行為上形作られるのかを詳細に記述することを目的とした。分析にあたって, 会話内で参加者が志向するアイデンティティを動的に捉えるという観点を基本に置いた。分析の結果, 「誤り訂正」が失敗に終わった場面においては, 会話参加者間で志向するアイデンティティにズレが生じていること, つまり第二言語話者は「教わる者」としてのアイデンティティに常には志向しないことが明らかになった。この結果からは, 相互理解を目的とする日常会話においては, 相互理解を達成するプロセスの上に学びを状況付けることが重要である, ということが示唆されるのではないだろうか。

31. 日本人学生による留学生の会話行動の評価-中国語を母語とする中級・上級日本語学習者との初対面会話の場合-

大津友美（東京外国語大学）

本研究は、初対面状況で、日本人学生が留学生の会話行動をどのように評価するかを論じるものである。中国語を母語とする中級・上級日本語学習者と日本人学生の実際の初対面会話の後で、日本人学生を対象にインタビュー（プレイバック・セッション）を行い、留学生の会話行動のどんな要素を好意的・非好意的に評価したのか、会話時の意識を調べた。さらに、留学生の日本語能力が評価に及ぼした影響についても述べる。

32. 表記の学習支援を目的とした web 教材「日本語かつくん」の開発

李 相穆・増田真理子・前原かおる・菊地康人（東京大学）

本発表では、単語、および短文の表記（ひらがなスペリング）の学習支援を目的として開発した web 教材を紹介する。この教材の特徴は、学習者がタイプした文字列の正誤判定を行うだけでなく、文字綴りの誤り箇所のフィードバックを段階的に示してくれる点にある。これによって、ディクテーション、語彙学習などをサポートすることができる。また、練習に使用する単語（短文）や、タスクのヒントの出し方を学習レベルに合わせて調整できることもその特徴のひとつである。

33. アジア人財共通教材「キャリア・プラン プロジェクト」を用いた日本人学生と留学生との協働授業活動の試み-異文化と個人の多様性の捉え方-

仁科浩美・鈴木敏之（山形大学）

本研究は、日本企業への就職を目標とした留学生が日本人学生とともに協働での学習活動を行った授業について報告するものである。この授業の特徴は、文化の違いを体験することではなく、「職を得る」という共通目標に向かい、一緒にキャリアに関する知識を学ぶことである。しかし、副次的に参加者らは協働での活動を通し、文化への相違点を認識した。同時に、思考や価値観の共通性にも目が向けられ、さらには文化の違いではなく、単に個人差としての多様性によるものであるとも認識した。

34. 複数キャンパス大学における日本語学習支援ボランティア導入の試み

高橋志野・向井留実子（愛媛大学）

日本語要旨：大学の複数キャンパスで日本語教育を行う場合、メインキャンパスとそれ以外では授業レベル数・コマ数や内容が異なることも少なくない。愛媛大学も3キャンパスを有し、メインキャンパスの日本語授業では日本語学習支援ボランティア J-support を積極的に活用しているが、医学部では参加者の確保が難しい。この問題を解決するため、今年度医学部のある地域でボランティア講座を開催した。その結果、医学部のボランティア確保と地域との連携推進という成果もあがったが、医学部日本語カリキュラムとボランティア講座の内容の見直しが必要であることも明らかとなった。

35. 自律的な学習を支援するために-教師の専門性を考える-

鈴木理子（桜美林大学）

本発表は、大学留学生対象の自律学習を基盤とした個別対応型日本語授業「チュートリアル」における初級学習者の漢字学習 A の事例を報告し、考察するものである。事例では、教師とのかかわりを重ねることにより、A はニーズを明確化し、漢字学習を選び、リソースを絵本→まんが→市販の漢字テキストと変えていった。教師は、A の学習状況、学習に対する A の分析や感想を見ることで、A に対する働きかけのしかたを決めていった。この相互決定プロセスを分析することで、自律的な学習を支援するために必要とされる教師の専門性として、「言語に関する知識と説明能力」「学習者が自分の学習について考えられるようにするための工夫」「学習目標・方

法・リソースのバリエーションに関する知識」「学習の実施状況の把握」「学習者のニーズ・学習スタイル・日本語能力についての適切な認識」「タイミングと程度をコントロールした働きかけ」などの 7 点が明らかとなった。

36. 選択性が高い漢字索引の開発

ヴォロビヨワ・ガリーナ（キルギス日本語教師会）

本研究の目的は漢字字典のための新しいタイプの漢字索引の開発である。日本語学習者にとって漢字字典で調べたい漢字を見つけるのは容易ではない。しかし、漢字語彙の多い日本語の文章の読解には、漢字字典が効率よく活用できることが重要である。本研究では、学習者の効率的な漢字字典の活用のために、まず、漢字索引の選択係数を定義し、それをもとに既存の漢字字典の索引の効率性を評価した。その結果、既存の索引の効率性は低いことが明らかになった。一方、筆者らが構築した漢字の構造分解に基づいた新しいタイプのアルファベット・コード索引とシンボル・コード索引とセマンチック・コード索引は、選択性が高く効率的であることがわかった。

37. テレビドラマを用いたシナリオドラマ活動についての実践報告-活動に参加した学習者の意識を中心として-

津崎浩一（中央大学校）・山本智子（又松大学校）

韓国の大学で学ぶ日本語学習者を対象に行った予備調査を通し、学習者が抱える問題点を解決するため、テレビドラマを用いたシナリオドラマ活動を基本軸とする授業試案をデザインした。この試案に沿って、7 つの大学 12 クラスで上記授業を実施し、活動に参加した 191 名の学習者と 8 名の教師に意識調査を行った。本発表では、この調査結果とその考察を、テレビドラマを用いたシナリオドラマ活動の効果や問題点などに触れつつ報告する。

38. 論理的記述とは-日本留学試験の記述問題を使用して-

宮島良子（名古屋大学）

アカデミックライティング教育を考える上で、学習者の母語がどのような修辭構造があるのかを知っておくことは重要なことである。そこで、カンボジア人の母語（クメール語）による論理的記述とはどのようなものであるのかについて、日本留学試験記述問題を用いて、調査した。まず、法学部 1 年生約 100 名が書いたものを、修辭構造の違いによって分類した。そして、3 名のカンボジア人が EJU の論理的記述の採点基準に基づき、0-3 点で評価した。更に、学生及び評価者に半構造化インタビューを行った。その結果、カンボジア人学生は意見文を「意見-実証-意見」という演繹型で書く傾向が強いこと、段落分けに問題があること、同じ文化背景を有していても評価が難しいことが示され、様々な問題が見えてきた。

39. 平仮名習得と学習意欲継続-タイの「選択科目」受講学生の場合-

中村伊予子（奈良教育大学大学院生）

選択科目で日本語を学習する初級前半のタイ人学習者の、「日本語学習継続に関する問題」が見落とされている点に着目する。文字習得が不十分であると、文字や文章を読むことができず、学習に対しての意欲を損なう恐れがある。また、文字を覚えられないことが、様々な学習の達成感の障壁にもなる。選択科目で日本語を学ぶ学習者の学習放棄の原因は、平仮名学習段階のつまづきが影響している。学習意欲継続の立場から、平仮名に対して「補助文字」を併記した教材の活用を模索し、「補助文字」併記がこれらの問題に効果があると考えられる。一方で、学習者にとっての「読みやすい表記」の観点では、表記文字種・フォント・表記文字の大きさの問題、日本語能力の観点では、発音習得への影響が考えられる。選択科目で日本語を学ぶタイの日本語学習者の現状を見直し、選択科目で学ぶ学習者に対する、学習機会の提供や保障を視野に入れて考えていく。

40. 教育実習における視野の拡大を目的とした反省会の試み

大和啓子（筑波大学大学院生）・生天目知美（東京大学）・永井涼子（筑波大学大学院生）

実習生は教育実習の中で、自己の授業を振り返る観点・視野を広げる必要がある。本稿では実習後に行われる反省会を通じて、実習生の授業実践における視野拡大を目指した試みを報告する。実習生がより幅広い観点から問題点に気づき、考え、次の実践へ繋げていくという内省サイクルを作っていけるようになることを狙い、反省会を、授業振り返りの観点拡大を実践的に学ぶ場として位置づけた。実習毎に開かれた反省会には、学習目標の明確化や学習者目線という観点を中心とした授業観察の枠組みの提示、会の前後には、反省メモへの記入を導入した。このような反省会を通して実習生の視野がどのように変化したのかを観察した。その結果として①実践的なことに関する視野は広がりやすく定着しやすい、②授業全体を捉える観点は知識としては得られるが定着しにくい、③学習者目線に立つという反省の観点は意識しにくい、という傾向がみられた。

41. 初級学習者を対象にした「できるまで音読」の試み-日本語らしい発音への意識化-

田口香奈恵・柿崎里奈（東海大学）

初級から自然なアクセントで話すことを意識させることで、中上級クラスへ上がった時に、より発音を意識した日本語の習得ができるようになるのではないかと考えた。そこで、アクセントとイントネーションを中心とした「できるまで音読」という練習を試みた。これは、自宅での練習と授業での録音、授業時間外での個別フィードバックという一連の流れを学習者各々のペースで繰り返し行う発音練習法である。この方法により、発音の上達やより自然な日本語への意識化を促進することができた。

【昼食について】

当日は、大学内の学生食堂の営業がありません。会場の向かいのマクドナルドのみ営業しています。大学周辺にはレストラン等も少ないので、昼食をご持参くださいますようお願い申し上げます。会場内はお茶コーナーを除き「飲食禁止」です。お弁当をご持参の場合には、マクドナルド2階のフリースペースをご利用ください。

【懇親会】

後片付け終了後、19号館LAXホールにて懇親会を行います。ぜひご参加ください。会費は3000円です。

【会場案内】

神奈川大学横浜キャンパス 16号館 セレストホール
〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1
045-481-5661(代表)

【会場までの交通】

- 最寄駅： 東急東横線 白楽 (徒歩13分)
- 東急東横線 東白楽 (バス5分・徒歩2分)
- JR京浜東北線 東神奈川 (バス10分・徒歩2分)
- 京浜急行線 仲木戸駅 (バス10分・徒歩2分)
- JR東海道線 横浜 (バス15分・徒歩2分)
- 横浜市営地下鉄 片倉町 (バス5分・徒歩2分)

*バスの系統・乗り場・行き先などは、大学案内図の中の説明をご覧ください。

<http://www.kanagawa-u.ac.jp/02/accessmap/>

●新宿・渋谷方面から

- ・東急東横線に乘車し、白楽駅で下車、徒歩 13 分です。
- ・東急東横線に乘車し、東白楽駅で下車、36 系統（緑車庫行き・菅田町行き）または 82 系統（八反橋行き・神大寺入り口行き）のバスをご利用ください。
- ・J R 湘南新宿ラインに乘車し、横浜駅で下車、バスをご利用ください。

●東京・品川方面から

- ・J R 東海道線または J R 横須賀線に乘車し横浜駅で下車、バスをご利用ください。
- ・J R 京浜東北線に乘車し、東神奈川駅で下車、バスをご利用ください。
- ・京浜急行線横浜方面行きに乘車し、横浜駅または仲木戸駅で下車します。仲木戸駅と東神奈川駅は隣接していますので、東神奈川駅のバス停よりバスをご利用ください。

●東海道新幹線新横浜駅方面から

- ・横浜市営地下鉄横浜方面行きに乘車し、片倉町で下車し、バスをご利用ください。
- ・J R 横浜線横浜方面行きに乘車し、菊名で東急東横線に乗り換え、白楽で下車、徒歩 13 分です。東白楽下車し、バスを利用することもできます。

●羽田空港から

- ・空港リムジンバス横浜駅東口行きに乘車します。横浜駅西口に移動し、西口のバス停から横浜市営バスをご利用ください。羽田空港から横浜駅東口までの所要時間は 20～30 分です。
- ・京浜急行線横浜方面行きに乘車し、仲木戸駅または横浜駅で下車し、バスをご利用ください。

●タクシー

「神奈川大学正門」とお伝えください。横浜駅西口からは所要時間約 10 分で 1000 円程度、東神奈川駅・東白楽駅・片倉町駅からは所要時間約 5 分で 800 円程度、東海道新幹線新横浜駅からは所要時間約 15 分で 2000 円程度です。なお、白楽駅にはタクシー乗り場がありませんので、ご注意ください。

【会場の地図】

YU Yokohama campus
横浜キャンパス



交通のご案内

- 東急東横線白楽駅下車徒歩13分
 - 横浜駅西口パスターミナルから横浜市営バスを利用(東神奈川駅西口経由 約15分)
 - ①番乗り場36系統「菅田町」行または「緑車庫」行「神奈川大学入口」下車
 - ①番乗り場82系統「八反橋」行または「神大寺入口」行「神奈川大学入口」下車
 - 横浜市営地下鉄片倉町駅から横浜市営バスを利用(約6分)
 - ②番乗り場36・82系統「東神奈川駅」または「横浜駅西口」行「神奈川大学入口」下車
- ※駐車場はありません。

校舎配置図



【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。会費を未納の方は早急にお支払いいただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくこととなりますのでご注意ください。会費は、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がありでしたら事務局までe-mailにてお問い合わせください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会